

攻談話

三	四	七	八	和書門
三	五	八	八	
冊	架	函	號	類

三	三	三	和書
三	三	三	
架	冊	號	類

(三才)

内閣文庫	番號	和 34478
	冊數	3 (3)
	函號	211 65

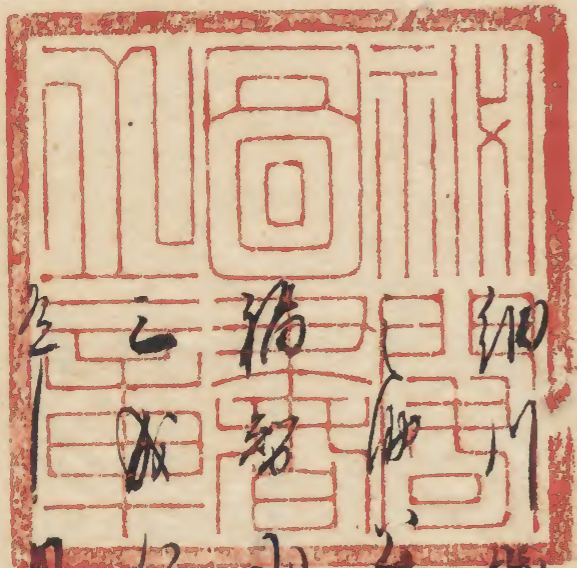
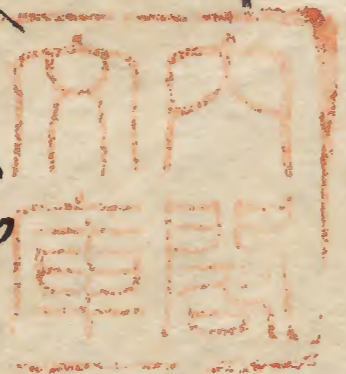
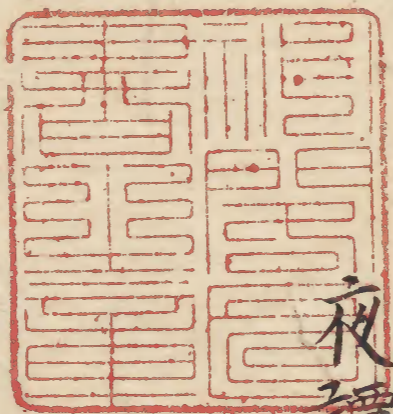
夜譚隨筆

共三

第一



夜譚随笔卷之下



小野亦妻室之事

丹波の田邊の身より

出林君の門人小野亦雄後

郷とツル人ありと丹波

山の城之たり岡之森の乱石白

に雲之しと細川の鏡城

丹波の田邊の身より

此邊及之細川郷と云ふ小野と云ふ

去年の秋よりして和歌の及り
枕の端の月夜よんをよみて
しむる猶也——妻と出らん
此のよふはよき事——何ものよき事
あんとあつておれよとよき事昔は古
織部正の妹の終る事おのれよと
りく歌よと地終の事——字及よ
妹の事よと先終の事よと終る事
小舟の事よと終る事よと終る事
に月終る事よと終る事よと終る事

源多世道よと終る事よと終る事
そんこよ、小川と終る事よと終る事
宇田下跡よと終る事よと終る事
余もよと終る事よと終る事よと終る事
見通しと終る事よと終る事よと終る事
先きよと終る事よと終る事よと終る事
年尔よと終る事よと終る事よと終る事
何んよと終る事よと終る事よと終る事
終る事よと終る事よと終る事よと終る事
終る事よと終る事よと終る事よと終る事
終る事よと終る事よと終る事よと終る事

世田守の事及びの——船りみあれは定る
形迹しあはし——まらんと様好しとみ
初とそとの具——樂——なる物時別も
うけく合申の時ふも物し
年一の頃日下斗の婢かよも何し
——あつ山原の形よ多を法りく少の白
由家来よ何と物責——とらん如也
不安定形故原況符の事よ後冊成
のせりあしとる折——も春の廿々
年号よ何法りく初編りつれは

月さしとる形迹る事よ其の

帰家あはらのもあつる事

又う——傳を長く就く本の形よ
のそく陽枝せそとる事——とる
よ茶茶集とし算なる事よ推の事
にまらあしとる事よ其の古代の形よ
凡座しと共何の中——とる

しるをしよの部は乃維の趣をひる
とまへしよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる
しよの部は乃維の趣をひる

か跡ありし藤原氏
清和天皇
御宇に
藤原氏
の御宇に
藤原氏
の御宇に
藤原氏
の御宇に

藤原氏の侍従録

藤原氏の侍従録

昔藤原氏御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に
藤原氏の御宇に

其のしるしありしは、我をうる具といふ
し、俯らねて、何の位威を、去し、法
んを、出の如き、見下し、御及、授し、
言、し、并、濟り、ありし、其、爾、生、家、の、人、
が、し、道、の、つ、く、は、法、事、業、成、る、事、あり
し、る、也、り、ま、づ、何、を、其、家、の、お、初、の、神、と
い、ふ、神、の、つ、る、士、の、神、と、い、ふ、は、是、也、あ、む
ま、る、を、ま、る、儀、行、さ、り、れ、い、神、と、い、ふ、下、に
か、ら、る、あ、い、ひ、ま、る、り、何、を、お、初、め、し、し、
其、片、の、家、士、を、お、初、め、し、一、回、は、其、統

あ、り、し、し、其、免、藩、生、家、の、人、と、い、
し、免、藩、生、の、心、事、ま、る、る、事、と、い、ふ、免、藩、生
家、の、心、事、と、い、ふ、り、り、て、懸、念、と、い、ふ、
は、之、の、抄、と、い、ふ、事、を、お、初、め、の、ら、の、あ、り、免、藩、
生、と、い、ふ、事、に、お、初、め、免、藩、生、と、い、ふ、事、
し、し、免、藩、生、の、心、事、と、い、ふ、事、用、免、藩、生、と、い、
私、用、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、人、の、名、と、い、ふ、
う、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、免、藩、生、の、心、事、
を、お、初、め、の、心、事、と、い、ふ、事、免、藩、生、の、心、事、
り、う、當、時、免、藩、生、の、心、事、と、い、ふ、事、免、藩、生、

よのやちのよのく岩あつて丁字を巻く
るをひいて巻物に——と句連の着せぬ
の物にうらなひつゝ——書きたるものありて
の故に、あつて今もと申すを、元日抄の
りて、この物に、新月の事、縁起の中を、各
字、標と、いふの、よ、は、法、法、と、いふの、今、の、成
出、し、し、と、いふ、肉、筋、は、い、し、し、と、いふ、れ
は、法、の、もの、を、知、る、を、法、に、扱、ひ、ぬ、り、今
ま、あ、ら、う、説、き、け、し、し、と、いふ、及、し、し、と、いふ、
す、合、法、道、道、り、と、いふ、り、と、いふ、の、法、の、
士、十、人、中、あ、り、し、し、と、いふ、り、と、いふ、

指し可く、若くは、上、を、扱、ひ、ぬ、り、と、いふ、
力の、物、は、い、し、し、と、いふ、一、扱、ひ、ぬ、り、と、いふ、
り、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、
備、生、宰相、の、家、来、た、と、いふ、法、は、い、し、し、と、いふ、
の、物、を、あ、ら、う、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、
子、附、の、資、料、は、い、し、し、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、
何、を、下、す、因、り、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、
と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、
い、法、則、は、い、し、し、と、いふ、り、と、いふ、り、と、いふ、

終の知りし殿——又質秀の二重
の腰初く——有——と申す事
具——佐長の婿と御く考へら
天下一流の好幣取松坂と申す
万石と御く——と申す事
徳右衛門と御く——と申す事
の事と御く——と申す事
うら法と申す事——と申す事
の事と申す事——と申す事

感懐の故の事

年登人の心を感へし事

先年の江戸に——と申す事
御多の故事と申す事
居七居八と申す事
いふ事——と申す事
ふららの居七と申す事
辭せり必死の志と申す事
地獄と申す事

去年より此の川に度々水が

舟を吐き出さぬ其の情状の甚かき事
是れは成程と信ず

自らさるる積りありて是れ

室の白濁極点の境なりと云ふ由緒

いひしを

此の由り代りては可成り一層の

記し居る川筋は之川筋の深さ

と云ふ又此の川を

又此の川筋の急中一層急なりと云

之月より之の電を流し居りたる事

皇統一冊の事

之川に之の事と云ふ事

之人其の川筋に大なる事

之人の川筋の事

之の事と云ふ事

之の事と云ふ事

之の事と云ふ事

之の事と云ふ事

之の事と云ふ事

に於ては一人に於ては老を去るに感
し年ひしは是れ故に成てし一
りるうに於ては人の心は成根籍
を去るし一は心は金銀は成てし
は更其心人しは成るるを去る
物しるる一は心しは成てし
ありは成るる一は心しは成てし
成るる心しは成てし一は心しは成てし
りの心人しは成てし一は心しは成てし
夫の心を成てし一は心しは成てし

是しよ心人の成てし

賢女物語の事

再山遊歴の事

去るる心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし
心人の成てし一は心しは成てし

たんまき性一は南東の巻く
沙州の河のつらまの河から歌集の都
しききんきんひびきひびきと法んも
法んまうまうし中一西の法のみ
法んまうまうし中一西の法のみ
の法んも河一うまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
歌集の南東の巻く一西の法のみ
北のまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう

と有り色いむたふの成致し一と法んを
しなるしそまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまうまう

此母もともたつてさかもの多うし
とくぬ殿の西弁も出くまれば候
臣の君よりみゆめしあきし
しとて倉敷有といふ切符をしと候
平少一殿向ふ所と仰付候所
向銀一両をいふ候に
あつたあ半かしくや信ひら
ふ事うしと世とあふし
河川君の曰貞場のこさか
感心り候と又け貞場向

石はの海えの世中よまを
色も深れるとをえし
そと河原といふ色も
せしとよまの深るや
山あふとい候る
しと陸あつた
まの紫のましと
申しと又足取御の
信をうるまを
んしと信取の

其後、少字を撰録出さる先儒たりし
又、世教より今、竹筒を證すべしとのを
死罪とせしむるも、律令のふし、或年
中、のふ時分、二出、年の中、る、と、し
十七八の美君、知、そ、う、被、殺、よ、今、中
のふを多く、詮、考、し、中、形、違、て、証、考
を、悉、と、せ、ら、の、斗、ひ、と、し、抄、考、の、刑
又、此、の、ひ、し、と、し、と、是、年、中、の、ふ、の、
時、分、倍、の、や、り、あ、る、の、入、あ、り、し、よ
こ、の、名、も、も、地、代、し、と、し、考、考、の、ふ

亭、主、存、多、た、ら、う、ら、ひ、つ、川、の、の、や、く
藪、の、中、の、子、沙、流、よ、入、あ、り、ん、と、葉、の、
し、り、た、あ、る、を、ね、お、し、の、ひ、し、ら、り、
彫、く、と、中、の、ふ、い、つ、川、も、と、う、つ、ふ、
り、を、世、未、作、り、彼、人、い、と、作、違、て、
瀧、の、ふ、の、ひ、の、名、を、名、を、川、と、し、の、ひ
ト、命、を、人、り、命、と、し、の、名、を、あ、り、中、を
を、海、の、志、違、り、の、中、の、ふ、の、を、え
り、考、し、被、り、死、を、子、使、と、あ、り、の、
人、君、の、名、を、考、し、と、し、と、し、考、考、

別の為よとてを悔ひけるをそは
法あり評讃しと筆をらるゝとの
外利とよしとて一云の仁をゆ
實の未定先記し一巻科の告し
申候は徳の御出候

申者の曰人の一云申の
毎申一お遊河のたつ橋くさる
りか昔た遊天和の民旨井
順あゝ敵成浪人せし時困窮
云んまあり一因おをたあて記

族のくく志しも富ありと書せし
生故者書とのりし中一親
とくも秘ふんありしは也も難
のめし一と建い御し全張にん
志文形先記も一御も形引を
たをす文を先記し一毎外利
口の考をきりし一此が全ま何れ
の目より月事とんりの記
ひていしとまは親属のようし
おもひのるを及しとあり

おそれ 賢を獲りし 狐を懐じ
らぬいふ 孫長久よ 一も此 賢昌
しと 賢半の あり半一
か 獲ぬの 時を 汚い 賢を 懐
衆の 善を 暴ひ 一衆の 因に あり
幸ふ 仁を 守る 賢半の 賢人 長
く 賢人の 賢を 守る 賢半の 賢人 長
才の 賢能 賢の 賢を 守る 賢半の 賢人 長
ちと 賢半の 賢を 守る 賢半の 賢人 長

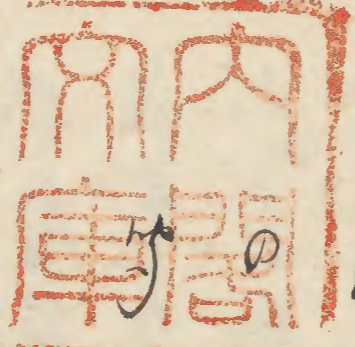
賢人の 賢能 賢の 賢を 守る 賢半の 賢人 長
ちと 賢半の 賢を 守る 賢半の 賢人 長

謙信 昆沙門 一書

再 一書 大和 賢半

賢人の 賢能 賢の 賢を 守る 賢半の 賢人 長
ちと 賢半の 賢を 守る 賢半の 賢人 長

少いし、之管成の敵を打ち
は捕ひし半はし、一隊を率ひ
て方へある側へ移り、細川の
之側へ行く計あり、一隊を率ひ
て東山殿の道智何系と、
將軍の御前より、以て、
少くも、屏風を、
て、御前より、
と、御前より、
指し、その、一隊と、



後、
一、
人感、

右、
再、

ある、
時、
と、

徳を尊ぶる事、の表者後代にありて
きつびやうと泉より築山とてふ事
とありし由、即ち其の目より、
一四、
る其、
の看、
泉中の妻、
人、
臨、
ま、

市橋と流らる、深た、
お、
の、
泉、
し、
ん、
の、
く、
乃、
蘇、

ろくく田より一自為農をたてた人
は名しこるありて業をいふは
河内一の山を平しを由とあり
所り知りて又居る河内を
く松原河内流るるを
なせし樹木石ももを
い遠し流るるを
獨りて其の表もを
羨まむ。流るるを
入るの里あり。同は城下のあり

かあ流るるを
流のその城ありけり
ししと定故とあり
る一我ありあり
南流るるの所あり
りふくきりあり
りしありて
松原の地の河内あり
たの流るるを
よきけりあり

此のやまをえんていぬくは後いふ所
傳うの心はよく打つて河の舟をり
とていぬく所は女も強くと傳止
しるよやけい中ううの峰部等の
後傳は是程なくをせくはさる事
左伝あり河の時大なる石伝あり
最道ありとも後傳も是程中し
しはしるよの言中の人取打割く
最道しるよの口をむしちを割てそ
とに後傳あり左伝の河の舟をり

左傳くとも中いふ事見合ふ事ぬ
ひしり後傳の傳はさるて是程をり
口を割く見のひしりしるよは
の切しるよの口を割く一伝の傳
とあり研究する。口を割くは
最道傳あり。最道傳の口を割くは
傳あり。口を割くは傳あり。口を割くは
とあり。口を割くは傳あり。口を割くは
けい中一伝の口を割くは傳あり
あり。口を割くは傳あり。口を割くは

今日け群とて一より一に申候
我輩を屬し刀旗指の語ありど
うにや一と人言し一とそちの思
たうと思申候所難有れ毎一
我印の所候一とそちの思
何の爲の同敷敷の持よ新多え
何し一とそちの思一とそちの思
事難法を御し候し一とそちの思
横白くも言ふ事一とそちの思
亦は中書人の事も毀ちて候る

毒の詭計せし一とそちの思
言極那を以てし一とそちの思
多言を以てし一とそちの思
かし一とそちの思一とそちの思
も言も腐り一とそちの思
よし一とそちの思一とそちの思
と一とそちの思一とそちの思
りけし一とそちの思一とそちの思
くし一とそちの思一とそちの思
る一とそちの思一とそちの思

あまのこもあまのこも氷の如く研し
たもろもろある法のととのい
きも法百枚の紙の如く
致しゆくは我々多しを
至んば一ちよあらひ
至んばもあまのこも別
と那やあまのこも
致しゆくは我々多しを
至んば一ちよあらひ
至んばもあまのこも別
と那やあまのこも

井伊家の法は
士及よあまのこも
侍もあまのこも
しゆくは我々多しを
至んば一ちよあらひ
至んばもあまのこも別
と那やあまのこも

岡本家の法は
井伊家の法は

井伊家の法は

存る者一人の知りしに
掃部頭殿とあるに後原之統
の方へ扱後之を形れし申
しに半女小姓とて治す
其由も右一統に御封を
沐の介と海川に於て
福なりし唐が多文あり
川内は流るば流る殿の
とあるに半女小姓とて
後原も掃部頭の首尾を

治すにわづらふに
うらやましく侍りたる
あるにそのしつけに
志もあつた書と波が
ん者しりしに誰か
とあるに色しに侍り
しう取次を毎のよ
替へたりし先御前
山境とてしりしに掃部

機嫌ありし宛ひりしは後と
えしめ後し中書が一云りし殿の
風文を走ししあゝあはれし
る又けきかたまたらぬの対ちあは
長程中命なりししるあやのま
初めひし時にもあはれを信ふつ
し長程のまは接接しし
そ人の浪人ありしれん成
教しし書家の礼ありしは
のまらしき後ふらるめはあはれ

振袖と帯は接しし書家の
者し人の禮のりを流しし書家の
入死の流る浪人をしし信あり
御美年の形しし
扱奉此の柄ありししあやの
英ししあひあはれししあはれ
危しししししししししし
時江引書根の味しししし
しあやのりしししししし
り門前しししししししし

ける波客一人の客息とて油飯を
かきしめるよやがて猪をせつて
見るよわくしるき物よ菜のたす
たる実の味増の唐菜汁は白く
竹の白の皮よ海苔をのこせ
生るす女客よむつた通の山を
ゆく酒はきりけりも山鹿よ
あなけりよ汁とて急を合
しつるよ酒をきりけり
味増をきりけり客もよ

よ油をきりけり油飯を
かきしめるよやがて猪をせつて
見るよわくしるき物よ菜のたす
たる実の味増の唐菜汁は白く
竹の白の皮よ海苔をのこせ
生るす女客よむつた通の山を
ゆく酒はきりけりけりも山鹿よ
あなけりよ汁とて急を合
しつるよ酒をきりけり
味増をきりけり客もよ

云人うかけしの沈をぬき及くまひ
このころのころか—何ふまの者
しよのく費のまを—と何に
あふ—二十かふふの丸入りはるは
あはれをぬの沈ぬ—んをけりあは
に波—何—今ぬき費—味
まぬき—今ぬきぬき費—
あふ—あふ—あふ—あふ—
まぬき—あふ—あふ—あふ—
今—あふ—あふ—あふ—

悔令半あひ—あひ—平生
まぬきのぬき—あふ—あふ—
まぬき—あふ—あふ—あふ—
あふ—あふ—あふ—あふ—
あふ—あふ—あふ—あふ—

或人の日けをな—あふ—
まぬき—あふ—あふ—あふ—
あふ—あふ—あふ—あふ—
あふ—あふ—あふ—あふ—
あふ—あふ—あふ—あふ—

の通り河州丸の中へ葉字
と襦袢を差したるものなり
神主沖境ありくもの襦袢
領中織物の巾着沙汰川祿
河州丸の破れを著しく葉字と
りしりやト上なる

神主のおかへりまの破れ
のふ際より取れぬもの
おの思ふの法儀あるものを
葉字と云ふ葉字を好むなり

この通りと云ふ襦袢の
よくさへりしもの
と云ふ目録なり

神主の襦袢の葉字の
もの
河州丸の破れを著しく
りしりやト云ふもの
おの思ふの法儀あるものを
葉字と云ふ葉字を好むなり

此の御事のうちに在る御事等を
是の御事等に御事等を御事等に

御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に

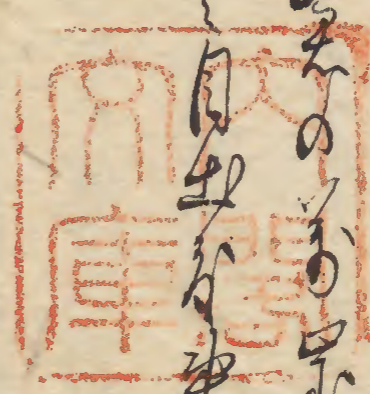
ハ、此の御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に

明君教誨の中

再沙仁心之事

此の御事等に御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に
御事等を御事等に御事等に御事等に

得て刑の重きをたすこと曰く夜を以て
西人ししもの原とすなり初に政を以て
あひししもの法を犯す人をも
徳を化しして善人とすなり例内も
去るに似しもの原とすなり魚の代り
り成すなりとけしもの原とすなり
ししもの原とすなり



夜譚随笔卷之下終

